

ミシェル・フーコーの内戦論

——歴史—政治的主権批判の可能性をさぐる——

京都大学 箱田徹

本報告では、ミシェル・フーコーが1970年代前半のコレージュ・ド・フランス講義で用いた「内戦」の図式を検討し、この観点を70年代後半以降の統治論の文脈に導入する切り口を探る。そして「真理による統治」という観点が、フーコーの権力論／統治論を、社会内部で生じる知的認識と歴史的語りをめぐる政治的争いという70年代半ばの視点に接続する上で有用であることを示す。

1970年代前半のフーコー（Foucault 1997=2007 & 2013）は「内戦」「戦争」の語を用いて、18世紀後半～19世紀初頭のフランスでの「社会防衛」の展開を捉えようとした。契約という擬制で成立する市民社会 *société civile* は、契約関係を脅かす「敵」を内部に抱える。したがってかれらとの内戦 *guerre civile* に勝ち続けることが社会の存続要件だ。さらに市民社会は捕らえた「社会の敵」を死刑にするか、社会に再び「統合」するかの判断をも迫られる。この意味で社会防衛とは「別の手段による戦争の継続としての政治」（Foucault 1997=2007）と呼ぶことができる。

Foucault [2013] は、主にフランスで刑務所への収容が主要な刑罰となる19世紀前後の事態の推移を、近代刑法理論と個人の道徳的教化という異質な要素の交錯であると捉え、イデオロギー批判や経済中心の説明とは異なる権力論を展開する。「懲罰社会」には、この表現を題目とした1972/73年度講義の終盤で「規律社会」の名が与えられる。収容を一般的刑罰とし、被収容者の矯正＝悔い改めを目指す社会は、恒常的な戦争状態にあるとも言えるだろう。たとえば身体と時間の使い方をめぐって労働者が資本や国家とさまざまに渡り合い、局所的な勝利と敗北を積み重ねているからだ。

当時の議論はその多くが Foucault [1975=1977] に結実した。だが少し経つと戦争の語で権力関係が論じられる機会は減り、代わりに「真理ゲーム *jeux de la vérité*」なる表現が多用される。この動きが生じた理由は、関係論的な権力概念と、敵味方の二項対立を連想させる戦争モデルとが齟齬を来すようになったからだと説明されがちだ。たしかにゲームの構図は、真理と技術を介した「自己と他者の統治」という1980年代に全面化する統治論の構図（箱田 2013）を理解する上で協力だ。だが一方で、フーコーの主体論がリベラルな社会の構想と接近する根拠として、70年代末の統治性講義とカントの啓蒙論、80年代のパレーシア論が理解される機会を生み出してもいる。

これに対して報告者は、戦争とゲームという2つのモデルは、「真理による統治」（Foucault 2012）という観点から架橋できると考える。主権による他者の統治は、政治的正統性を確保する上で世界認識と歴史化された語りとは切り離しえないという1979年の議論は、Foucault (1997=2007) の主題の一つ、すなわち既存の統治は、それに異を唱える被治者の「別の」歴史的語りからつねに挑戦を受けるという論点と結びつく。「真理による統治」によれば統治の要には真理がある。ゆえに真理を巡る争いは、統治の正統性をめぐり統治の場の内部で繰り広げられる。このとき「真理ゲーム」は「契約」という擬制をも歴史化する政治的な「内戦」として読み直すことができるだろう。

文献

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Gallimard (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)

---, 1997, *Il faut défendre la société: cours au Collège de France (1975-1976)*, Seuil/Gallimard. (=2007, 石田英敬・小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない』筑摩書房.)

---, 2012, *Le gouvernement des vivants: cours au Collège de France 1979-1980*, Seuil/Gallimard.

---, 2013, *La société punitive: cours au Collège de France 1972-1973*, Seuil/Gallimard.

箱田徹, 2013, 『フーコーの闘争——〈統治する主体〉の誕生』慶應義塾大学出版会.